



Title	現代におけるコミュニケーションの言語としてのラテン語
Author(s)	原田, 裕司
Citation	大阪大学言語文化学. 1992, 1, p. 53-66
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/78200
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

現代におけるコミュニケーションの言語としてのラテン語*

原田 裕司**

Latinitatem si quis dixerit tam recentium hominum communicationi prodesse quam pristinorum, certe ille vulgari risui exponetur. sermonem tamen Latinum hodie magis magisque humanam communicationem promoturum mihi propositum est in hoc commentariolo demonstrare. praesertim in Europa, quae iam iam una ex diversis civitatibus fieri coepit, sermo Latinus maiorem vim adhibiturus esse videtur, quippe qui ex antiquo tempore communi usui Europaeis fuit. hodie tamen plurimi opinantur Latinitatem verbis carere, quae innumerabiles res hoc tempore inventas digne significare possint. quae opinio quanto errori subiecta sit, maxime elucet, si audimus NUNTIOS LATINOS ex Radiophonia Finnica emissos aut legimus VOCEM LATINAM commentarios periodicos Saraviponti editos. ibi enim nihil restat novarum rerum, quin Latine exprimi possit, et illis nuntiantibus facile cognoscere possumus, quaecumque in orbe terrarum aguntur.

Latinitas autem, quoniam hodie nullius populi sermo est patrius, 'opinionibus praeiudicatis nationalismi vacat', ut ait professor quidam Slovenus, et iure habetur 'vinculum Europae redintegrandae', cui profitendo maxime Finni operam dant. adiuvante etiam iucunditate Latine colloquendi, quam Latinitatis cultores hodie summe contendunt iuventuti notam facere, certe mox illa verba Gaii Licoppe perficientur, qui dixit 'sermonem Latinum favore communicationi, in qua necessario nititur amicitia'.

1 はじめに

言語の持つ最大の機能は、コミュニケーション、すなわち伝達である。伝達の対象には客観的な知識のみならず個人の意志や感情も含まれるゆえに、コミュニ

*De sermone Latino humanae communicationi promovendae (Hirosius HARADA)

**言語文化部ドイツ語教育講座

ケーションは個人間の相互理解を担うものであるともいえる。ところで本論の主題であるラテン語の役割を考える場合、古今の書物に蓄えられた知識を伝達する機能を、この由緒ある言語に否認する人はいないであろう。古代地中海世界に一大文化圏を築いたローマ帝国の滅亡後も、その母国語であるラテン語はヨーロッパ文化の基盤をなし、古代、中世はもちろん近代に至るまで、学術を中心とする幾多の名著の言語となった。それは現代においてもなお、貴重な知識をもたらす言語として、学ぶに値するものである。しかし過去において蓄積された知識を学び取る場合はともかくとして、20世紀の現代に生きる者同士間のコミュニケーションの言語としてラテン語が今なお相応の役割を果たし得ると考える人は、今日では恐らく稀であろう。ラテン語を生まれながらの母国語として日常の会話に用いる国民は今日では存在せず、その意味でラテン語は「死んだ言語」であると一般に考えられているからである。しかし結論からいうと事実はその逆であり、ラテン語は、過去ならぬ現代の情報を各国間の言語の違いを越えて伝達し、相互理解を取り持つコミュニケーションの言語として、今なお捨てがたい価値と役割を保ち続けているのである。ラテン語の持つそのような価値と役割は、今まさに一つになろうとするヨーロッパ共通の言語的かすがいとして今日一層の注目を集めつつある。このことを現代のヨーロッパにおけるラテン語運動の一端を紹介することにより、明らかにすることが本論の目的である。具体的には、現在ヨーロッパで定期刊行されている最も重要なラテン語雑誌 VOX LATINA（ラテンの声）およびフィンランドで行われているラテン語ラジオ放送を取り上げて検討し、ヨーロッパ統合におけるこの新たな精神運動の行末をうらなう。また最後に補論として、ラテン語の普遍性と現代におけるその使用の意義について若干の考察を付す。

2 ラテン語雑誌 VOX LATINA

1991年の1月1日午前9時5分から10時まで、イギリスBBCは、「今日におけるラテン語」についての番組を放送した。筆者がそのことを知ったのは、ラテン語雑誌 VOX LATINA の第104号中に掲載された一記事によってである¹⁾。当然ながらラテン語で書かれたこの記事は、ドイツのザールブリュッケン大学にあるこの雑誌の編集局に宛てて、イギリスのリーズ在住の Osvaldus A.W. Dilke 氏から投稿されたものであった。番組では、ラテン語が「死んだ言語」でないこ

¹VL[=VOX LATINA] 104, pp.277-278.

との証人として2人のイギリス人が招かれ、自分が手紙や会話にラテン語を用いたり、チューイングムやハンバーガーを言い表すラテン語の語彙までそろっていると語ったこと²⁾、また元首相ハロルド・マクミランがオックスフォード大学名誉総長だった頃、ラテン語の‘sine die’を‘saini daei’と発音するなど、「古風で野蛮な」ラテン語発音法を用いていたエピソードが紹介されたという。

イギリスからのこの投稿例からも分かるように、VOX LATINA は、ドイツに編集局を置くものの、あらゆる国のラテン語愛好者からの投稿を受け付けている。それは1965年に創刊号を世に送ってから年に4回の発行を続け、1990年に第100号を刊行した。ザールブリュッケン大学に編集局が置かれた1976年からは、Caelestis Eichenseer 神父・博士が、編集長の職務を担っている。創刊当初は70ページほどであった各号は、年々その内容を増し続け、今日では毎号約150ページを数えている。定期予約購読者はヨーロッパを中心に全世界に分布し、その数は1990年の時点で約1,300人に上っている³⁾。日本に住む筆者もそのうちの一人であり、拙文を寄稿したこともある⁴⁾。VOX LATINA の掲載内容は、文学・歴史等に関する学術的な論説から、コンピューター・サイエンスを含む現代の科学技術についての解説⁵⁾、ラテン語・ラテン文化に関する様々な催しの予告および報告、投稿者の自国の文化紹介、自作のラテン詩の披露、著書の紹介など、実に多岐にわたっている。これらに加え、東欧・ソ連の変革、湾岸戦争などその年に起きた重大な国際的出来事が *Chronicalia* (時事録) という形でラテン語で記録されるほか、各読者から編集者に宛てられたラテン語の手紙が掲載されている。

VOX LATINA がヨーロッパで最も重要なラテン語雑誌であるのは、それがヨーロッパ各地に散在する今日のラテン語運動をすべて網羅しているからである。そこでは Eichenseer 神父が主宰してスイスとベルギーで年2回催されるラテン語会話のセミナーが詳しく紹介されるばかりではない。ヨーロッパで定期刊行されるラテン語雑誌には VOX LATINA の他に、筆者の知る限りでは、ベルギーのブリュッセルに編集局を置く MELISSA、南フランスのポーで発刊されている MAS (*Memento Audere Semper*) がある。それらの編集部は互いに緊密な連絡を取り合っており、MELISSA 主幹の Gaius Licoppe 博士や MAS の発刊者 Genovefa Immè 女史の

² チューイングムは ‘cummis ad masticandum’、略して ‘masticatorium’、ハンバーガーは ‘bubula Hammaburgensis’ と呼ばれる。

³ Cf. VL 100, p.152.

⁴ VL 87, pp.50-56: ‘De Latinarum litterarum initiis quae fuerunt in Iaponia’.

⁵ Cf. VL 104, pp.152-160: Ranierus Thiel, ‘De scriptis per computatrum condendis’.

メッセージが VOX LATINA に掲載されることもしばしばである。この他にドイツのミュンヘンには、ラテン語のための大規模な国際的祝祭 LVDI LATINI (ラテン祝祭) およびラテン語による広範な学術セミナー SCHOLAE FRISINGENSES (フライジング学校) を主催する「ラテン祝祭協会」(Societas Ludis Latinis faciundis) がある。その主宰者であるミュンヘン大学教授 Valahfridus Stroh 氏のメッセージも、VOX LATINA に頻繁に掲載されている。またフィンランドでは、この国の民族叙事詩「カレワラ」のラテン語訳⁶⁾ で知られる Thomas Pekkanen ユベスキュレ大学教授がラテン語運動を推進しているが、同教授の主導により 1989 年にフィンランド・ラジオ局でラテン語によるニュース放送が開始されたことは、VOX LATINA でも歓迎をもって報じられたところである。

このように、VOX LATINA を読むと、少なくとも今日のヨーロッパの人達がラテン語をどのような目で見直し始めているかが、ラテン語に関わる具体的な最新の出来事を通じて窺われる。またこの雑誌は、さまざまな母国語を持つ人々がラテン語という一つ言語で情報を交換し合うコミュニケーションの場でもある。日本の俳句までもがラテン語に直され披露されているのを見ると⁷⁾、それは異文化理解の場でもあるということが出来る。本論では次に、VOX LATINA によって知り得たフィンランドにおけるラテン語ラジオ放送の開始という画期的な出来事を取り上げ、「報道」という現代のコミュニケーションの言語としてラテン語が果たしている機能を確認する。さらに、そのようなラテン語の機能を助長する現代ヨーロッパの動向を、「統合」との関連において考察していきたい。

3 フィンランドにおけるラテン語ラジオ放送

1989 年秋にヘルシンキにあるフィンランド・ラジオ局は、Pekkanen 教授の主導のもと、ラテン語によるラジオ放送を開始した。この放送は毎週一回約 5 分間行なわれ、フィンランド国内のみならず、短波放送によって全世界で受信できる。時間帯や周波数など半年ごとの放送プログラムが VOX LATINA で随時紹介され

⁶⁾ *Kalevala Latina*. Carmen epicum nationis Finnorum [...] transtulit Tuomo Pekkanen. Helsinki 1986.

⁷⁾ VL 104, pp.294-296: existimatio libri Henrici Reinhardt: *Centura haicum*. Eine Sammlung von gut hundert Gedichten in japanischer Manier und lateinischer Sprache. Herausgegeben, übersetzt und kommentiert von Robert Chlada. Frankfurt/M, Bern, New York, Paris 1991.

ながら、世界でも画期的なこの放送は現在に至っている。筆者は VOX LATINA 第 98 号 (p.562 以下) によってラテン語放送の開始を知り、短波放送専用ラジオとアンテナを購入して、この放送の受信に成功した⁸⁾。日本を含む東アジア向けの放送は、1992 年 1 月現在日本時間で毎週土曜日と日曜日の 18 時 55 分 (世界時間 9 時 55 分) 頃から 19 時までの約 5 分間に行なわれる (4 月から 9 月はヨーロッパ夏時間のため 1 時間早まる)。日本では周波数 17800 キロヘルツで最も良く受信できる。放送内容は世界およびフィンランドに関するニュースで、「ラテン語ニュース」を意味する ‘NUNTII LATINI’ が、この番組の名前となっている。現在では Virgula Seppälä-Pekkanen 女史 (Pekkanen 教授の夫人) と Gregorius Pitkäranta ユベスキュレ大学教授が交代してラテン語のアナウンスを担当している。ラジオニュースで報じられるような時事的出来事が、いわゆる「死んだ言語」であるラテン語でどのように表現されているかは大変興味深いところであるので、1991 年 12 月 21 日に筆者が自ら受信して書き取ったラテン語ニュース全文を先ずオリジナルで紹介し、次にそれを日本語に訳す。

Nuntii Latini Radiophoniae Finnicae Generalis. In studio Helsinkiensi est Reijo Pitkäranta.

Praesidens Unionis Sovieticae Mihail Gorbatshev se magistratu abdicare videtur. Radiophonia quidem Moscuensis die Iovis mane eum iam tabulis eius rei subscripsisse nuntiavit. Antea praesidentes Yeltsin et Gorbatshev una consenserunt, ut Unio Sovietica Kalendis Ianuariis officialiter exstare desineret et ad signum eius rei vexillum rubrum a culmine Kremlini auferretur. Praesidens Russiae Boris Yeltsin colloquio televisioni Italiae dato dixit praesidentem Gorbatshev in nova rerum publicarum communitate novas partes acturum esse.

Primus minister Sinarum Li Peng collegam suum Indum Narasimha Rao in urbe Delio convenit. Quo in conventu ministri pacti sunt, ut mercatura in confinio utriusque civitatis sineretur, cum confinium antea clausum esset. Insuper ministri pacto cooperationis scientificae et technologicae subscripserunt et decreverunt, ut consulatus in urbibus Sanghaevo et Bombaia aperirentur.

⁸⁾ 短波受信に関し大阪大学大学院生永谷益朗君の教示に深謝する。

Itaque ea contentio non levis, quae inter Sinas et Indiam post bellum abhinc triginta fere annos gestum aestuat, paulatim mitescere videtur.

Societas Americana nomine General Motors, cui maximus in mundo complexus industrialis autocinetis faciendis est, viginti duas fabricas claudit, quo fit, ut septuaginta milia opificum labore priventur. Difficultates oeconomicae, quae etiam alias societates industriales Americanas vexant, effecerunt, ut praesidens George Bush non iam tanta aura populari fruatur quam ante.

Die Lunae media urbe Londinio bomba displosit, quo factum est, ut comectus traminum totius urbis consisteret et plus decies centena milia hominum ad opera et laborem properantium itinere prohiberentur. Corpus terroristicum, quod vulgo IRA appellatur, illud facinus commisisse creditur, quod his diebus etiam alia huius modi scelera fecit.

Ignis Olympicus prorsus sollemniter accensus est, ac quidem ita, ut femina Graeca vestem sacerdotis induta eum ritu antiquo a radiis solis caperet. Hoc factum est Olympiae, in oppido Graeciae, unde fax illa in aeroplano sono velociore nomine Concordia Lutetiam Parisiorum delata est. Ibi ignis Olympicus a prima ministra Francogalliae Edith Cresson exceptus per totam Francogalliam circumferri coeptus est. Mense Februarii ineunte Albertopolin perveniet, ubi Olympia hiberna futura celebrabuntur.

UNESCO sive Unitarum Nationum Educationis et Scientiarum Ordo in indicem monumentorum mundi tuendorum etiam duo loca Finnica accepit. Quorum unus est Suomenlinna sive Castellum Finniae, monumentum vetus maritimum, quod in insula apud Helsinkium iacente ante duo saecula aedificatum est. Alter est Rauma oppidum vetus Finnicum.

Finis Nuntiorum Latinorum huius septimanae. Omnibus radioauditoribus bonum festum nativitatis Domini opto.

フィンランド・ラジオ放送のラテン語ニュースです。ヘルシンキのスタジオからレイジョ・ピトケランタがお伝えます。

ソ連大統領ミハイル・ゴルバチョフは辞任するものと思われます。モスクワ放送の伝えるところでは、彼は木曜日〔12月19日〕朝既にその旨の書面に署名しました。これに先立ってエリツィンとゴルバチョフの両大統領は、ソ連が1月1

日をもって公式に消滅し、そのしるしとして紅旗がクレムリンの屋根から除去されることに合意しました。ロシア大統領ボリス・エリツインは、イタリア・テレビとのインタビューで、ゴルバチョフ大統領は新しい国家共同体において新たな役割を担うであろうと述べました。

中国首相李鵬は、デリーでインド首相ナラシンバ・ラオと会談しました。この会談で両首相は、これまで閉ざされていた両国国境地帯の通商を許可することで一致しました。さらに両首相は科学技術協定に調印し、上海とボンベイに総領事館を開設することを決めました。約30年前に交戦して以来、中・印両国は少なからぬ緊張関係にありましたが、それも徐々に緩和されるものと思われます。

自動車製造で世界最大の規模を誇る米国企業ジェネラル・モーターズは、22個の工場を閉鎖することになりました。その結果7万人の労働者が失業します。他の米国企業をも巻き込んだこの経済不況の結果、ジョージ・ブッシュ大統領にはもはや以前のような国民の人気はありません。

月曜日 [12月16日] ロンドンの中心部で爆弾が炸裂しました。その結果、全市中の鉄道がストップし、職場へと急ぐ100万人以上の人々が通勤を妨げられました。IRAと呼ばれるテロ組織がこの犯行を為したものと思われます。この組織はここ数日間に他にも同種の犯行を行なったからです。

オリンピックの聖火がきわめて厳粛に採火されました [12月12日]。神官の衣装をまとったギリシア人女性が古代の流儀により太陽の光から聖火を受けました。この儀式はギリシアのオリンピアで行われ、その地から聖火は超音速旅客機コンコルドでパリへ運ばれました [12月14日]。パリでオリンピックの聖火はフランス首相エディット・クレソンによって受け取られた後、フランス全土を回る旅につきました。2月上旬に聖火は、次期冬季オリンピックが開催されるアルペールビルに到着します。

ユネスコすなわち国際連合教育科学機関は、国際保護指定物のリストに二つのフィンランドの場所を加えました。一つは「フィンランドの城」を意味するスオメンリンナで、ヘルシンキ沖合いの島に二百年前に築かれた海端の古城です。もう一つはフィンランドの古い町ラウマです。

今週のラテン語ニュースはこれで終わります。すべての聴取者の皆様が良きクリスマスを迎えられますようお祈りいたします。

雑音の多い短波放送にもかかわらず日本でも完璧な理解が可能なほどに聞き取れるこのラテン語ニュースは、きわめて分かりやすい構文を示している。またこのニュースで人名がラテン語化されることなくオリジナルの形で発音されることは、古来のラテン文の伝統に外れるものであるが、それは逆に時事の報道を容易に理解せしめるものである。フィンランドではこの他に、タンペレ大学にあるラジオ局でも 1990 年にラテン語ニュースが開始されたことが、VOX LATINA 第 104 号 (p.273 以下) で報じられている。同号に紹介された 1990 年 11 月 21 日付のこのラテン語ニュースでは、フィンランドの人気スポーツであるアイスホッケーの試合経過が詳しく報告されている。また 12 月 5 日付では、フィンランドの作曲家シベリウスの誕生日である 12 月 8 日 (フィンランドの音楽の日) にちなんだ様々な催しが報じられている。これらの例を見れば分かるように、ラテン語がラジオ放送という現代の報道の言語として小規模ではあれ機能していることは事実である。時事報道に不可欠な現代用語の点でも、今日では様々なラテン語現代語彙集が編集され市販されている⁹⁾。時事用語だけではなく、コンピューターなど現代の先端技術を表現するラテン語の単語も随時整えられ、VOX LATINA でも紹介されている¹⁰⁾。このことから、ラテン語が現代の事を言い表わすのに不備な言語であるとの指摘は、単なる先入観に過ぎないことが分かる。他方ヨーロッパの国でありながらインド・ヨーロッパ語族の母国語を持たず、古代ローマの領土と決して境を接したことがなかったフィンランドで何故ラテン語がかくも愛好されているのか、あるいは民衆語ではなくラテン語で報道を行なうことの意義は何かという問題については、ヨーロッパ統合とラテン語の関連を考える次章に譲ろうと思う。

4 ヨーロッパ統合の言語としてのラテン語

M. von Donat 氏は「EC マガジン」(10/77)において、「相互理解のための統一言語がなければ、われわれはヨーロッパ連合国家を達成することはないであろう」と述べている¹¹⁾。また 1974 年 4 月にストラスブールの欧州議会では、ヨー

⁹⁾ Cf. Christian Helfer, *Lexicon auxiliare*, ed.2. Saarbrücken 1985. Caelestis Eichenseer, *Latinitas viva. Pars lexicalis*, ed.2. Saarbrücken 1982.

¹⁰⁾ VL 104, p.159.

¹¹⁾ Verba citata in: Carl Vossen, *Mutter Latein und ihre Töchter*. Düsseldorf 1983, p.177.

ロッパ統合を可能にする統一言語の必要性に関し、ラテン語を共通語に用いようとする提案が二人のオランダ人議員 (Schelto Patijn / Arie van der Hek) によってなされている¹²⁾。このことに関連して、VOX LATINA 編集長 Eichenseer 神父は、1978年にドイツの有力雑誌「シュピーゲル」(16/1978)のインタビューを受けた。ヨーロッパの第二言語(母国語の次に学ぶ言語)としてラテン語を推奨する理由を尋ねられた神父は、英・独・仏語など特定国の母国語を用いることには、特定の文化圏の優越を助長する懸念があると述べている¹³⁾。

ラテン語が現在民衆語としては「死んだ言語」であり、いかなる国民の母国語でもないゆえにこそ、この言語はヨーロッパの共通語として、すべてのヨーロッパの国民に平等の発言機会を開いているというのである。歴史的に見ても、英・独・仏語などの「有力語」を国語として持たないヨーロッパの小国は、国際的な発言を行う言語としてラテン語を用いることにより、大国に対して対等の立場を貫こうとした経緯がある。ヴァチカンのローマ法王庁を除き、特にハンガリーなど東欧の諸国において、ラテン語が最も遅くまで公用の言語として用いられてきた事実がこのことを物語っている¹⁴⁾。フィンランドというヨーロッパ北辺の国でラテン語放送が開始されたことも決して偶然ではない。

この問題に関し1992年1月の時点で筆者に最新の情報を提供してくれるものは、ブリュッセルで年に4回発行されているラテン語雑誌 MELISSA 第45号(1991年12月16日発行)である。この中では、パリにあるフィンランド文化センターで1991年10月25日から27日にかけて開催された「ラテン語シンポジウム」のあらましが、Francisca Deraedt 女史によって報告されている¹⁵⁾。「ヨーロッパのかすがいとしてのラテン語」(De lingua Latina vinculo Europae)をテーマとしたこのシンポジウムでは、さまざまな国籍を持つ16人のヨーロッパ人が基調報告を行なった。基調報告は当然のこと、来賓の Iacobus Numminen フィンランド教育相の挨拶までもがラテン語でなされたのである。Deraedt 女史によると、中世にキリスト教を受け入れたフィンランド人は、以後ヨーロッパの一員たらんことを欲し、自分達が「ヨーロッパのかすがい」とみなすラテン語を今日に至るまで変わらず愛好し続けた。彼らの母国語が他のヨーロッパの言語とは全く違ったも

¹² Cf. *ibid.*, p.177.

¹³ Cf. *ibid.*, p.177.

¹⁴ Cf. *ibid.*, pp.133-141.

¹⁵ MELISSA 45, pp.3-4.

のであるだけに、スウェーデンやロシアといった強い隣国の言語に呑み込まれることなくヨーロッパの他国と交わろうとする時、彼らのすぎるべき言語は必然的にラテン語でしかなかったのである。その結果として、現代のヨーロッパ各国の中でも、フィンランド政府はどラテン語教育に力を注ぎ、資金面での援助を惜しまない政府はない。この国において初めてラテン語のラジオ放送が開始され、開始後2年以上を経過した今日なお存続していることは、全然不思議ではない。彼らはラテン語によって自らがヨーロッパの一員であることの証しを立てたいのである。

パリで行なわれたラテン語シンポジウムの基調報告の中では、昨今ユーゴスラビアから独立したスロベニア出身の *Caietanus Gantar* 教授が行なった報告がとりわけ興味深い¹⁶⁾。スロベニアでは、かつてオーストリア・ハンガリー帝国支配下で学位論文がスロベニア語ではなくドイツ語で書かれたのと同様、今日では英語で書かれる趨勢にあり、例えばリュブリャーナ大学では講義や演習まで母国語ではなく英語で行なおうと唱える者もあるという。そのような英語の猛威はかつてのドイツ語や近隣のセルビア語によるものよりずっとゆゆしいものであり、「この危難を避ける唯一の安全な道はラテン語しかない」と教授は言う。なぜならラテン語は「ナショナリズムや帝国主義に付きものの如何なる先入観をも免れている」のである。それゆえにこそ、今や学位論文は出来得るかぎりラテン語で書かれるべきだと教授は結論づけている。バルト三国の独立、ソ連やユーゴスラビアの解体という昨今のヨーロッパの改編は、同一国家内の民族問題の根深さを見せつけたが、そこには言語の問題もまた大きな影を投げかけている。「ラテン語は今日いかなる国の国語でもないゆえに、いかなる国の民族感情をも逆撫ですることはない」との *Eichenseer* 神父の指摘は¹⁷⁾、フィンランドやスロベニアの例によっても裏付けられている。このような主張はヨーロッパの統合を間近に控えた現在、ますます現実性を帯びて来ているのである。

ところで、ヨーロッパ統合を可能にする共通言語としては、ラテン語の他にエスペラント語を挙げる向きもあろう。この点を「シュピーゲル」に問われた *Eichenseer* 神父は、エスペラント語はレトルトで作られた人造言語であって、何世紀にもわたる使用を経て形成されたラテン語とは比べものにならないと一蹴している¹⁸⁾。ま

¹⁶⁾ Cf. *ibid.*, pp.3-4.

¹⁷⁾ Cf. *Vossen*, *op. cit.*, p.177.

¹⁸⁾ Cf. *ibid.*, p.178.

た、南フランスのポーで1986年に 에스ペラント語を記念する碑が建てられた時、当地のラテン語愛好者が VOX LATINA を通じて全世界に署名を募り¹⁹⁾、計330通の葉書署名(うち一通は筆者)を集めて、市長をして遂に念願のラテン語記念碑を建てさせた²⁰⁾。「世界市民たるべくラテン語を話すべし」(Latine loquere ut civis terrarum habeare)と刻字されたこの石碑の除幕式は、1991年1月に多くのラテン語愛好者を集めて盛大に行なわれた。その模様は VOX LATINA 第104号(p.247-255)で詳細に報じられたが、このエピソードは 에스ペラント語を越えてラテン語を世界の言語にと願う人々の熱意を良く示している。

これまで見て来たように、報道その他現代のコミュニケーションを司る点でも、ラテン語は十分に整備がなされた言語である。しかも歴史的に見てラテン語は、全ヨーロッパの文化の根底を支えて来た言語であるから、ヨーロッパ統合に際して必要となる共通言語として十分その機能を発揮すると考えられる。かつてイスラエルが建国にあたって、ユダヤ聖典の言語であるヘブライ語を政治的決定によって自らの国語としたごとく²¹⁾、古代から現代までヨーロッパで学ばれ続けたラテン語が再び全ヨーロッパの共通語として復活する可能性はある。その可能性を現実のものとするためには、学校におけるラテン語教育がこれまで以上に開かれたものとなり、青少年がラテン語の魅力と有益を心の底から納得しつつ学ぶことが必要である。事実そのようなラテン語学習の底辺拡大を図るべく、現代ヨーロッパのラテン語運動は当然のこと教育面に重きを置いている。Eichenseer 神父による「ラテン語セミナー」および Stroh 教授主宰の「フライング学校」のことは既に第2章で言及したが、ヨーロッパではこの他に大小さまざまなラテン語講習会が催されている。それらの催しの多くは、特に学校のラテン語教師や生徒の参加を求めており、日常会話を中心にラテン語を学ぶことの楽しさを教えている。歌や演劇はもちろん、ラテン語でサッカーの実況を行なう試みさえある²²⁾。そして、そのようなラテン語の「大衆化」を後押しするものとして、マスコミによる脚光が特に指摘できる。本論の第2章冒頭で「今日のラテン語」に関するBBCの番組を紹介したが、新聞・雑誌などでも新しいラテン語普及の試みが行き上りられることも最近では稀ではなくなった²³⁾。そのような環境整備が進むにつれ、将来

¹⁹ Cf. VL 86, p.554.

²⁰ Cf. VL 104, pp.247-255.

²¹ Cf. Vossen, op. cit., p.177.

²² Cf. *Süddeutsche Zeitung*. Freisinger Neueste Nachrichten, 31.7.1989.

²³ Cf. 'Singt dem Latein ein neues Lied', in: *Rheinischer Merkur*. Christ und Welt,

統合されたヨーロッパにおいて、コミュニケーションの言語としてのラテン語の役割がますます重要性を帯びて来ることが予想される。ここでは MELISSA 第 45 号に載せられた Licoppe 博士の次の言葉を引用することで、統合ヨーロッパとラテン語の関係を考察する本章の締めくくりとしたい。

全ヨーロッパの伝統に根ざした「人文主義」(studia humaniora)を育てることは、分裂したヨーロッパを結びつけ調和せしめる唯一の道である。ラテン語の使用はこのヨーロッパの伝統に属するものである。それは、友情の必須基盤であるコミュニケーションを促進し、個人と個人との間の親近感を増幅するのである²⁴⁾。

5 補論—ラテン語の普遍性とその使用の意義

そもそも古代ローマの帝国支配の過程でヨーロッパに広まったラテン語が、帝国滅亡後も放棄されなかったどころか、むしろヨーロッパ諸民族共通の公用語として尊重され続けたことには、どういう背景があるのであろうか。この点に関し、ラテン語が西方教会によってキリスト教を伝える主言語として受け入れられたことがその最大の要因であることは疑いのない事実である。しかしラテン語が現代に至るまで無数のヨーロッパの文人や科学者の心を捉え、彼らを新たな著作活動へと促したのは、ラテン語が彼らの宗教であるキリスト教の言語であったばかりではなく、時代の推移を超越して、キケローやウエルギリウスらに見られる最上の姿を永遠に保ち続ける完成した言語だからである。この言語は彼ら古典作家の著作において既にその最高の優姿に到達してしまった結果、以後文学語として如何なる時代的変遷を受けることも拒否したのである。なるほど古代ローマ民衆によって日常生活に使われていた口語ラテン語は、口語一般の持つ宿命として様々な変化を受け、現代のイタリア語やフランス語などのロマンス諸語へと俗語化した。しかしキケローや古典詩人達の著作を織り成した文学語としてのラテン語は、それとは全く別のものとして変わることのない永遠の形姿を保持し続けた。このいわゆる「古典ラテン語」は、西ローマ帝国の衰退後は西方教会の公用語として受

3.10.1986. 'Ludi Latini', in: *Omnibus* 13, March 1987 (Cambridge University Press).
Caelestis Eichenseer, *Latein Aktiv. Lateinisch sprechen und diskutieren*. Berlin, München 1984.

²⁴⁾MELISSA 45, p.2.

け入れられたが、それによってもラテン語は本質的な変化を受けなかった。それは教会がキリストの教えを広めるにあたり、最高の弁論的効果を発揮するキケローら古典作家のラテン語を最も高く評価したからであって、キケローに対するヒエローニムスの傾倒ぶりや²⁵⁾、ウェルギリウスの詩句に涙したアウグスティヌスの例²⁶⁾を見ればそのことは明らかである。このゆえにこそ、西ローマ帝国の滅亡後もラテン語は、ヨーロッパの各民族の違いを超越して聖職者を志す全ての人によって学ばれ続けたのであって、事実中世にはその量において古代を遥かに凌駕するラテン語の文献が著された。そしてそれらの著作が模範とするところはあくまでキケローの時代のラテン語だったのである。一部では古典ラテン語と中世以後のラテン語は違うといわれているが、両者は個々の語法の変異はともかくとして、その本質において少しも変わるところのない同一の言語である。ラテン語はいつの時代に書かれようとも、それはすべて本質的に「古典ラテン語」なのであって、この普遍のラテン語こそ、古代以後の二千年にわたりヨーロッパの各民族間の言語的相違を超越して公用語ないし学術の言語として尊ばれ、会話や著作に実際に用いられたのである。現代においてもラテン語の学習を推奨し続け、これを公文書に用いているローマ法王庁の例を待つまでもない²⁷⁾。ドイツでは1688年にライプツィヒの法学教授トマジウスが初めてドイツ語の講義を行なうまで、大学の講義はすべてラテン語で行なわれた。ルネサンスの人文主義者エラスムスは、初心者のためのラテン語会話入門書を自ら著した²⁸⁾。またニュートン、フランシス・ベーコン、スピノザなど、自然・人文科学の別を問わず大多数のヨーロッパの学者がラテン語で著作したことは指摘するまでもない事実である。本論で紹介した現代ヨーロッパにおけるラテン語運動も、二千年の間変わらず培われ続けたこの同じラテン語に依拠することには変わりはない。現代の事物を表わす新たなラテン語の語彙も、古典の造語法に倣って造られたり、現存する膨大なラテン語文献を渉獵して見つけ出されたものであり、それらは永いラテン語の伝統から逸脱したものでは決してない。同様にVOX LATINAやフィンランドのラジオ放送に見られるラテン語も決して特殊なものではない。それらは巧拙の差こそあれ、キケローの時代と本質的に何ら変わるところのない「古典ラテン語」なのである。

²⁵⁾ Cf. Hieronymus, *Epistulae*, XXII,30.

²⁶⁾ Cf. Augustinus, *Confessiones*, I,13.

²⁷⁾ Cf. VL 100, pp.215-225 et VL 101, pp.366-390.

²⁸⁾ Cf. Erasmus, *Familiarium colloquiorum formulae*. Basel 1522.

近代諸語とは決定的に異なるこのようなラテン語の本質に鑑みる時、現代の人間同士がラテン語でコミュニケーションを行なう場合には、英語などの現代の「国際語」を用いる場合は、全く違った意義と効果が存在することは明らかであろう。ラテン語を用いることは、ケケローなど二千年前のローマ人のみならず、古代・中世から近代に至るまでのあらゆるヨーロッパの国の知識人と同じ言語でじかに胸襟を開くことを可能にする。そして時間・空間を越えたこのとてつもなく重い伝統に直接連なっているとの思いが、激変する現代においてこの尊敬すべき言語で意志の疎通を行なう相手への頼まれな親近感を増大せしめるのである。伝達すべき内容に関係なく、たどたどしいながらもラテン語で言葉を交わすだけで、その言語がラテン語であるというそれだけの理由で、言葉を交わす二人の間には、言葉では表現しがたい連帯感と相手への尊敬の念が湧き起こるのである。私事で恐縮だが、筆者はヨーロッパでのラテン語に関する各種催しに参加したこともあって、さまざまな国のラテン語愛好者達と親しく懇談したことがある。特定の国の言語を用いることの許されない国際的な集会の場で、スペイン人やオランダ人、フィンランド人など、ふだんはほとんど会話する機会もない国の人達とたどたどしいながらもラテン語で歓談した時、われわれは互いの国籍を忘れて打ち解け合い、私は改めてこの古くて新しい言語の現代における意味をかみしめたものであった。1992年1月11日のフィンランド・ラテン語ニュースによると、これまでにヘルシンキの放送局に手紙を寄せたラテン語愛好者の国はヨーロッパ20か国にとどまらず、トルコ、北アメリカ、ブラジル、オセアニア、南アフリカ、東アジアでは日本、中国、シンガポールに及んでいる。「ラテン語が友情の必須基盤であるコミュニケーションを促進し、個人と個人との親近感を増幅する」との Licoppe 博士の言葉は、この言語による会話や文通を実際に体験した人にして初めて心から納得できるのである。